

令和4年度厚生労働科学研究費補助金
(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)
危険ドラッグと関連代謝物の有害作用評価と乱用実態把握に関する研究(21KC1003)

分担研究報告書

大麻を乱用する少年における新たな大麻関連製品、
危険ドラッグの乱用実態に関する研究

分担研究者：嶋根卓也（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 薬物依存研究部）
研究協力者：中島美鈴（肥前精神医療センター）
市村清隆（福岡県保健医療介護部薬務課）
児玉 臨（福岡県保健医療介護部薬務課）
榊田昂志（福岡県保健医療介護部薬務課）
野村由紀子（福岡県警察本部生活安全部少年課）
加々美誠（福岡県警察本部生活安全部少年課）
森 治美（福岡県警察本部生活安全部少年課）

【研究要旨】

[緒言] 近年、高濃度に抽出された THC を含有する大麻ベープ（リキッド、ワックスなど）が押収される事件が相次いでいるが、その使用実態については十分に研究されていない。そこで本研究では、大麻使用少年を対象として、大麻ベープの使用実態を明らかにすることを目的とした。研究対象は、福岡県保健医療介護部薬務課および福岡県警少年サポートセンターが実施している少年用大麻再乱用防止プログラム（以下、F-CAN）に参加する12～19歳の大麻使用少年である。[結果] 2021年9月から2023年1月までの間に、計17名の大麻使用少年がF-CANへの参加申込みを行った。このうち、選択基準を満たす12名より研究参加の同意を得た（同意取得率70.6%）。本研究ではこの12名を分析対象者とした。過去1年以内の大麻ベープの使用率は、全体の66.7%であった。大麻ベープ使用群は、対照群（非使用者）に比べて、大麻使用開始年齢が若く（ベープ群13.3歳、対照群15.8歳）、DAST-20スコアの平均値が高く（ベープ群8.6点、対照群3.3点）、それぞれ有意差が認められた。一方、MINIによる薬物依存および薬物乱用の診断には有意差が認められなかった。

[考察] 若年の大麻使用者の多くが、友人や仲間との付き合いの中で、大麻使用を開始していることが、これまで繰り返し指摘されてきた。低年齢で大麻に曝露されることは、そういった大麻を使う仲間との交流機会がより増えることにもつながる。大麻を使う仲間との交流の中で、大麻ベープを使う機会も一緒に増えた可能性がある。また、大麻ベープ使用群が抱えている問題は、精神医学的な依存症の問題というよりも、それ以外の大麻使用に伴う友人関係や家族関係、あるいは学校関係といった心理社会的な問題の方が中心となっている可能性が示唆された。いずれにせよ、十分なサンプル数が得られていない現状、大麻ベープ使用者の特徴についての結論を出す段階ではない。対象者のさらなるリクルートが必要である。

A. 研究目的

法務省が発行する令和4年版犯罪白書¹によれば、大麻取締法違反による検挙人員は近年急激に増加傾向にある。令和3年における検挙人員は5,783名（前年比9.9%増）であり、これは記録が残されている昭和46年以降で最も多い。検挙人員の多くは若年者であり、全体の7割～8割を20歳代および30歳代の若年層が占めている。20歳未満の少年事犯についても急増している。

若年期からの大麻使用は、薬物依存のリスクを高めることが知られており、薬物依存症の予防という観点からは、10代における早期の大麻使用を防止することが重要となる。例えば2003年の全米薬物使用調査（National Survey on Drug Use and Health）のデータを使った分析によれば、13～18歳に大麻を使い始めた人は、成人してから使い始めた人に比べ、薬物依存と診断されるリスクが約5倍～7倍高いことが報告されている²。また、若年期における大麻使用は、使用頻度に応じて影響が増大することが知られている。オーストラリア・ニュージーランドにおける大規模コホート研究によれば、17歳以前の大麻使用頻度が高くなるにつれて、学業へのネガティブな影響（高校を卒業できない、単位を取得できない）があり、他の違法薬物の使用リスクや、自殺企図のリスクが増大することが報告されている³。こうした背景にも関わらず、国内における大麻を対象とする医学的研究の多くが、主として精神科医療施設を受診した30～40歳代の患者を対象としたものであり^{4,6}、10歳代の若年期における大麻使用の実態についてはほとんど報告されていない。

一方、国内の大麻の取り締まりに関する近年の特徴として、高濃度に抽出されたTHCを含有するワックスやリキッドタイプの大麻製品が押収される事件が相次いでいる。これら的大麻製品は、電子タバコを用いたベイパーと呼ばれる方法（Vaping Marijuana: 以下、大麻ベイプと表記）で使用される場合が多い。全米の青少年を対象とする薬物調査として知られる

Monitoring the Future では、2017年より大麻ベイプの使用状況について調査されている⁷。第12年生（日本における高校3年生に相当）における大麻ベイプの使用率は、生涯経験率25.7%、過去1年経験率18.3%、過去1ヶ月経験率12.4%と報告されている（2021年調査）。大麻ベイプに関する調査を開始した2017年における使用率（生涯経験率11.9%、過去1年経験率9.5%、過去1ヶ月経験率4.9%）と比較すると大幅に増加している。一方、従来の乾燥大麻の使用率については横這いで推移している。これらは、大麻ベイプが青少年の間で急速に広回っていることを示唆する結果と言える。米国では、大麻ベイプ（および電子タバコ）の使用に伴う二次的な急性肺障害の発生が指摘されており、電子タバコまたはベイプ製品関連肺障害（E-cigarette- or vaping product-associated lung injury）という言葉も使われるようになってきている⁸。

大麻ベイプに関する先行研究としては、前述したモニタリング調査の他、タバコ製品との併用に関する研究^{9,10}や、使用動機に関する質的研究¹¹などが報告されているものの、大麻ベイプ使用者の薬物依存の重症度、大麻ベイプを選択するメリット、大麻に対する考え・感情・信念といった心理社会的な側面を量的に調べた研究は未だにない。そこで本研究では、10歳代の大麻使用少年を対象に、大麻ベイプを含む大麻の使用実態および危険ドラッグを含む大麻以外の違法薬物の使用実態を明らかにすることを目的とした。

B. 研究方法

1. 研究対象者

研究対象となるのは、福岡県保健医療介護部薬務課（以下、福岡県薬務課と表記）の事業であり、福岡県警少年サポートセンターが実施協力している少年用大麻再乱用防止プログラム（以下、F-CANと表記）に参加する大麻使用少年である。2021年9月から2023年1月までの間に、計17名の大麻使用少年がF-CANへの参加申込みを行った。このうち、選択基準を満た

す 12 名より研究参加の同意を得た（同意取得率 70.6%）。本研究ではこの 12 名を分析対象者とした。

対象者の選定にあたっては、以下の選択基準および除外基準を設けた。

(1) 選択基準

- 1) F-CAN に参加する大麻使用少年
- 2) 初回参加時に実施される事前アンケートに回答した者
- 3) 事前アンケート回答時の年齢が 12 歳から 19 歳である者

【各選択基準の設定理由】

- 1) F-CAN に参加する大麻使用少年がリクルート対象であるため
- 2) 本研究は事前アンケートのデータを二次利用するため
- 3) 本研究では大麻使用少年を 20 歳未満と定義する。また、プログラムのリクルート対象者は、「飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査」で大麻使用が報告されている年齢のうち、最も若い 12 歳を下限とした。

(2) 除外基準

- 1) 事前アンケートに回答していない者
- 2) 事前アンケートに回答時の年齢が 12 歳から 19 歳ではない者

【各除外基準の設定理由】

- 1) 本研究は事前アンケートのデータを二次利用するため
- 2) 本研究では大麻使用少年を 20 歳未満と定義する。また、プログラムのリクルート対象者は、「飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査」で大麻使用が報告されている年齢のうち、最も若い 12 歳を下限とした。

2. インフォームドコンセント

本研究は、「侵襲を伴わない研究」、「介入を行わない研究」、「人体から取得された試料を用いない研究」であり、要配慮個人情報を取得しな

い研究に該当する。人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針に基づき、必ずしもインフォームドコンセントを受けることを要しないが、本研究の実施について説明文書を用いて研究対象者に通知する。また、研究対象者が研究対象になることを拒否できる機会を保障するために、アンケート用紙の冒頭で、研究参加への同意の有無をチェックボックスにて確認する。なお、未成年者に該当する場合、同意は本人および保護者の双方を確認する。研究開始後に、同意を撤回する場合は、少年サポートセンターの少年育成指導官を窓口とし、福岡県警察本部生活安全部少年課、福岡県薬務課を介して、研究責任者に報告される。

3. 調査項目

大麻使用に関連する項目：初回使用年齢、大麻の初回使用年齢、過去 1 年以内の大麻の使用頻度（乾燥大麻、大麻ベイク、大麻成分を含んだ食品）、大麻と飲酒の併用頻度、大麻に対する考え・感情・信念（Marijuana Effect Expectancy Questionnaire¹²、6 項目）、大麻ベイクを選択するメリット・デメリット（7 項目）

大麻以外の薬物使用：過去 1 年以内の危険ドラッグ、覚醒剤、有機溶剤、MDMA、コカイン、ヘロイン、LSD、処方薬乱用、市販薬乱用

薬物依存に関連する項目：薬物関連問題の重症度（DAST-20 日本語版）^{13,14}、物質使用障害 M.I.N.I（精神疾患簡易構造化面接法）

その他の調査項目：過去 1 年以内のタバコの使用状況（紙巻きタバコ、加熱式タバコ、電子タバコ）、過去 1 年以内の飲酒頻度、ビンジ飲酒頻度、基本属性（性別、年齢、学歴、職歴など）

4. 統計解析

過去 1 年以内の大麻ベイクの使用歴に基づき、対象者をベイク群と対照群に分類した。基本属性、大麻使用に関連する項目、大麻以外の薬物使用、薬物依存に関連する項目について群間比較を行った。カテゴリカル変数についてはフィッシャーの正確確率法で、連続変数については t-検定にて有意差を検定した。

5. 倫理審査

本研究の研究計画書は、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得た（承認番号 A2021-124）。

C. 研究結果

表 1 に対象者の基本属性に関する結果を示した。調査時年齢の平均値は 16.2 歳であり、性別は女性 58.3%、男性 33.3%、その他 8.3%であった。対象者のうち 58.3%は学校に在籍しており、50.0%は何らかの仕事に就いていた。ベイズ群は対照群に比べて、調査時年齢が若く、女性の比率が高く、学校に在籍しており、仕事に就いていないという傾向がみられたが、いずれも有意差は認められなかった。

表 2 に大麻使用に関連する結果を示した。初回大麻使用年齢の平均値は 14.1 歳であった。過去 1 年以内の形状別にみた大麻使用率は、乾燥大麻 100%、大麻樹脂 8.3%、大麻ベイズ 66.7%、大麻食品 33.3%であった（複数回答）。過去 1 ヶ月以内の大麻使用日数（平均）は、6.5 日間であった。大麻使用に対する欲求は全体の 41.7%が「とても使いたい」あるいは「どちらかと言えば使いたい」に該当した。過去 1 年以内の大麻使用時のアルコールの併用は、対象者の 50%が経験していた。ベイズ群は対照群に比べて、初回大麻使用年齢が早く、ベイズ群 13.3 歳、対照群 15.8 歳であり、群間に有意差が認められた（ $p=0.021$ ）（図 1）。その他の項目については有意差が認められなかった。

表 3 に大麻以外の薬物使用および薬物依存に関する結果を示した。過去 1 年以内の大麻以外の薬物使用歴は、処方薬乱用が最も多く（50.0%）、市販薬乱用（41.7%）、有機溶剤（41.7%）、MDMA（33.3%）、LSD（33.3%）、コカイン（16.7%）、覚醒剤（8.3%）、危険ドラッグ（8.3%）と続いた。DAST-20 スコアの平均値は 6.8 点であり、66.8%がカットオフ値を超える DAST 陽性であった。MINI による評価では、対象者全体の 50.0%が薬物依存、83.3%が薬物乱用

の診断に該当した。ベイズ群は対照群に比べて、DAST-20 スコアの平均値が高く、ベイズ群 8.6 点、対照群 3.3 点であり、群間に有意差が認められた（ $p=0.038$ ）（図 1）。一方、MINI における薬物依存、薬物乱用の診断については有意差が認められなかった。

D. 考察

研究対象者のリクルート数が当初の予定より下回っている。計画では、F-CAN 参加者として年間 30 名程度を見込んでおり、このうち約 80%が研究対象として合致し、かつ同意が得られると仮定していた。同意取得率は 70.6%であり想定に近い数字となったが、F-CAN への参加者数自体が当初の想定を下回っているために、結果として研究にリクルートされる対象者も少なくなったと考えられる。

F-CAN への参加者数が伸び悩んでいる背景の一つとして、大麻使用少年の支援を受けることに対する動機づけが低いことが考えられる。現在、少年院を仮退院した少年や、保護観察対象となった少年たちを中心に保護観察所で主として保護観察官がプログラム参加に関する説明をしているものの、F-CAN への参加に同意が得られないケースが多い。今後は、関係機関の協力を得ながら、動機付けを高める取り組みが必要と考えられる。

本研究は、近年若年層を中心とする流行が懸念される新たな大麻の形状として、大麻ベイズ（リキッド、ワックス）に着目し、その使用実態および使用者の特徴を明らかにすることを目的とした。過去 1 年以内の大麻ベイズの使用率は、対象者の 66.7%に達しており、大麻使用少年たちの間で、大麻ベイズが着実に広がっている可能性が示唆される。大麻ベイズに比べて、THC を含有する大麻食品や、大麻樹脂の使用率は低かった。

今回の分析では、大麻ベイズ使用群は、対照群（非使用者）に比べて、大麻の使用開始年齢が有意に若いという結果が得られた。若年の大麻使用者の多くが、友人や仲間との付き合いの

中で、大麻使用を開始していることが、これまで繰り返し指摘されてきた。低年齢で大麻に曝露されることは、そういった大麻を使う仲間との交流機会がより増えることにもつながる。大麻を使う仲間との交流の中で、大麻パイプを使う機会も一緒に増えた可能性が考えられる。とはいえ、彼らがどのように乾燥大麻と大麻パイプを使い分けているのかについては、今回のデータでは論じることができない。今後は、乾燥大麻と大麻パイプの使用頻度、両者のメリット・デメリットなどの結果も踏まえて、大麻パイプ使用者の特徴をさらに検討していくことが必要となる。

一方、大麻パイプ使用群は対照群に比べて、薬物関連問題の重症度を示す DAST-20 のスコアが有意に高いという結果が得られたが、MINI による薬物依存や薬物乱用の診断については、群間に有意差が認められなかった。また、対象者のサンプル数が少ないために十分な検出力が得られず、有意差は認められていないものの、大麻パイプ使用群は、大麻の使用日数（過去 1 ヶ月間）が多い傾向がみられている。これらの結果は、大麻パイプ使用群が抱えている問題は、精神医学的な依存症の問題というよりも、それ以外の大麻使用に伴う友人関係や家族関係、あるいは学校関係といった心理社会的な問題の方が中心となっている可能性が示唆される。いずれにせよ、十分なサンプル数が得られていない現状、大麻パイプ使用者の特徴についての結論を出す段階ではない。対象者のさらなるリクルートが必要である。

E. 結論

大麻使用少年の間で、大麻パイプの使用が着実に広がっている可能性を示唆する結果が得られた。大麻パイプ使用者は、非使用者に比べて、大麻の初回使用年齢が若く、薬物使用関連問題の重症度が高いといった特徴がみられた。未だ十分なサンプル数が得られておらず、大麻パイプの使用実態を明らかにするためにはさらなるリクルートが必要である。

F. 参考文献

1. 令和 4 年版犯罪白書（法務省法務総合研究所）、2022.
2. Winters KC, et al: Likelihood of developing an alcohol and cannabis use disorder during youth: association with recent use and age. *Drug Alcohol Depend* 92(1-3): 239-247, 2008.
3. Silins E, et al. Cannabis Cohorts Research Consortium. Young adult sequelae of adolescent cannabis use: an integrative analysis. *Lancet Psychiatry*. 2014 Sep;1(4):286-93.
4. Tokui T, Yonemoto T, Iwashita S, et al. The six cases of cannabis psychosis. *Seishin-Igaku*. 1989;31:919-29. (in Japanese).
5. Yokoyama N, Murakami M, Katayama S. The three cases of marijuana psychosis. *Seishin-Igaku*. 1991;33:235-42. (in Japanese).
6. Matsumoto T, et al. Risk factors for the onset of dependence and chronic psychosis due to cannabis use: Survey of patients with cannabis-related psychiatric disorders. *Neuropsychopharmacol Rep*. 2020 Dec;40(4):332-341.
7. Monitoring the Future national survey results on drug use, 1975-2021 Data for In-School Surveys of 8th, 10th, and 12th Grade Students, Institute for Social Research, The University of Michigan. <http://monitoringthefuture.org/data/21data.htm>
8. Cherian SV, et al. E-Cigarette or Vaping Product-Associated Lung Injury: A Review. *Am J Med*. 2020 Jun;133(6):657-663. doi: 10.1016/j.amjmed.2020.02.004. Epub 2020 Mar 13. PMID: 32179055.
9. Trivers KF, et al. Prevalence of Cannabis Use in Electronic Cigarettes Among US Youth. *JAMA Pediatr*. 2018 Nov 1;172(11):1097-1099.
10. Kowitt SD, et al. Vaping cannabis among adolescents: prevalence and associations with tobacco use from a cross-sectional study in the USA. *BMJ Open*. 2019.

11. Aston ER, et al. Vaporization of Marijuana Among Recreational Users: A Qualitative Study. *J Stud Alcohol Drugs*. 2019.
12. Torrealday O, et al. Validation of the Marijuana Effect Expectancy Questionnaire-Brief. *J Child Adolesc Subst Abuse*. 2008;17(4):1-17.
13. Shimane T, et al. [Reliability and validity of the Japanese version of the DAST-20]. *Nihon Arukoru Yakubutsu Igakkai Zasshi*. 2015 Dec;50(6):310-24. Japanese. PMID: 26964292.
14. Skinner, H.: The Drug Abuse Screening Test. *Addictive Behaviors*, 7: 363–371, 1982.

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Takahashi M, Yamaki M, Kondo A, Hattori M, Kobayashi M, Shimane T: Prevalence of adverse childhood experiences and their association with suicidal ideation and non-suicidal self-injury among incarcerated methamphetamine users in Japan. *Child Abuse & Neglect* 131: 105763-105763, 2022.
- 2) 服部真人, 小林美智子, 高橋哲, 高岸百合子, 大宮宗一郎, 谷真如, 嶋根卓也: 覚醒剤使用の引き金に関する実証的研究—薬物依存と他のアディクションの併存に焦点を当てて—. *日本アルコール・薬物医学会誌* 57(3):127-142 2022.
- 3) 山田理沙, 嶋根卓也, 近藤あゆみ, 米澤雅子, 松本俊彦: 薬物依存症回復支援施設の利用者を対象とした物質使用と HIV 感染リスクの高い性行動に関する研究. *日本エイズ学会誌* 24(3): 89-97, 2022.
- 4) 服部真人, 小林美智子, 高橋哲, 高岸百合子, 大宮宗一郎, 谷真如, 嶋根卓也: 薬物依存と他のアディクションが併存する覚醒剤事犯者の特徴. *犯罪心学研究* 60(1): 1-15, 2022.
- 5) 新田慎一郎, 嶋根卓也, 猪浦智史, 近藤あゆみ, 米澤雅子, 松本俊彦: 覚醒剤使用に問題を抱えるゲイ・バイセクシュアル男性

の特徴 —ヘテロセクシュアル男性との比較から—. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 57(5): 182-192, 2022.

- 6) 嶋根卓也: 市販薬乱用とセルフメディケーション. *精神科治療学* 37(7):793-797, 2022.
- 7) 嶋根卓也: コロナ禍における薬物使用の動向: 薬物使用に関する全国住民調査 2021 より. *Newsletter KNOW (麻薬・覚せい剤乱用防止センター)* 第 107 号: 2-6, 2022.
- 8) 嶋根卓也: OTC 薬乱用の現状と対応—最も身近な医薬品の意外な落とし穴. *日本医事新報* No.5133: 18-34, 2022.
- 9) 嶋根卓也: 「助けて」という気持ちをクスリと一緒に飲み込んでしまう. *こころの科学* 226: 71-75, 2022.
- 10) 嶋根卓也: 若年者における薬物乱用の理解と課題. ダメ、ゼツタイで終わらせない薬物乱用防止教育. 令和 4 年度全国学校保健・安全研究大会 課題別研究協議会: 114-117, 2022.
- 11) 嶋根卓也: 20.物質使用障害. 医療者のための LGBTQ 講座 (総編集: 吉田絵理子), 南山堂, 東京, 2022.

2. 学会発表

- 1) Shimane T, Funada M, Tomiyama K, Matsumoto T: Increase in Abuse of Over-the-counter Drugs Including Opioids Such as Dihydrocodeine in Japan. The 2nd International Forum on Drug Policy, Shanghai, China, 2022. 8.4. (Best Paper Award)
- 2) Shimane T: Current Situation and Response to Over-the-Counter Drug Abuse in Japan. International symposium on prevention and counseling of drug abuse for juveniles. National Chung Cheng University, Taiwan, 2022.11.2.
- 3) Shimane T: Understanding and support for marijuana using youth in Japan. 2022 Drug Control Cross-network Innovation as Scientific and Technological Intelligence Drug

Prevention Achievements Publication and
International Symposium, Taiwan, 2022.11.4.

- 4) 嶋根卓也：法務総合研究所との共同研究による支援者向けの小冊子の作成：覚醒剤事犯者の理解とサポート 2021. シンポジウム 10 覚醒剤事犯者の理解とサポート(3). 2022 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城, 2022.9.9.
- 5) 嶋根卓也：高校生における大麻使用状況と大麻使用少年の心理社会的特徴：薬物使用と生活に関する全国高校生調査 2018 より. シンポジウム 13 大麻使用少年の理解とサポート(1). 2022 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城, 2022.9.10.
- 6) 嶋根卓也：覚醒剤使用者における危険な性行動：覚醒剤事犯者を対象とする全国調査より. シンポジウム 15 物質使用と性感染症・性行動・セクシュアリティ(1). 2022 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城, 2022.9.10.
- 7) 引土絵未, 嶋根卓也, 小高真美, 秋元恵一郎, 大吉 努, 加藤 隆, 栗坪千明, 山村りつ, 吉野美樹, 松本俊彦：薬物依存症者の就労支援のあり方に関する研究：インタビュー調査から. 2022 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城 (オンライン), 2022.9.9.
- 8) 中島美鈴, 児玉臨, 森治美, 嶋根卓也：身近な人とのコミュニケーションスキルに焦点つけた少年用大麻再乱用防止プログラムの作成 (1) . 第 22 回認知療法・認知行動療法学会, 東京, 2022.11.12.

K. 知的財産権の出願・登録状況

特許取得、実用新案登録、その他
特になし

表1. 研究対象となった大麻使用少年の基本属性 (n=12)

	全体 (n=12)		大麻パイプの使用				p-value
	n	%	対照群(n=4)		パイプ群(n=8)		
	n	%	n	%	n	%	
調査時年齢	16.2歳		17.8歳		15.4歳		0.070
性別							0.067
男性	4	33.3%	3	75.0%	1	12.5%	
女性	7	58.3%	1	25.0%	6	75.0%	
その他	1	8.3%	0	0.0%	1	12.5%	
学校への在籍 (調査時)							0.081
はい	5	41.7%	0	0.0%	5	62.5%	
いいえ	7	58.3%	4	100.0%	3	37.5%	
仕事をしている (調査時)							0.061
はい	6	50.0%	4	100.0%	2	25.0%	
いいえ	6	50.0%	0	0.0%	6	75.0%	

表2. 大麻パイプの使用経験別にみた大麻関連項目

	全体 (n=12)		大麻パイプの使用				p-value
	n	%	対照群(n=4)		パイプ群(n=8)		
	n	%	n	%	n	%	
初回大麻使用年齢							
平均年齢	14.1歳		15.8歳		13.3歳		0.021
過去1年以内の大麻使用 (複数回答)							
乾燥大麻 (ハッパ、ジョイント)	12	100.0%	4	100.0%	8	100.0%	—
大麻樹脂 (チョコ)	1	8.3%	0	0.0%	1	12.5%	1.000
大麻パイプ (ワックス、リキッド)	8	66.7%	0	0.0%	9	100.0%	—
大麻食品	4	33.3%	0	0.0%	5	50.0%	0.208
過去1ヶ月間での大麻使用日数							
平均日数	6.5日間		1.5日間		9.0日間		0.110
大麻使用に対する欲求							0.576
使いたい	5	41.7%	1	25.0%	4	50.0%	
使いたくない	7	58.3%	3	75.0%	4	50.0%	
大麻使用時の飲酒併用							0.545
あり	6	50.0%	1	25.0%	5	62.5%	
なし	6	50.0%	3	75.0%	3	37.5%	

表3. 大麻パイプの使用経験別にみた併用薬物および依存症関連項目

	全体		大麻パイプの使用				p-value
	(n=12)		対照群(n=4)		パイプ群(n=8)		
	n	%	n	%	n	%	
過去1年以内の薬物使用（大麻以外）							
有機溶剤	5	41.7%	0	0.0%	5	62.5%	0.081
覚醒剤	1	8.3%	0	0.0%	1	12.5%	1.000
危険ドラッグ	1	8.3%	0	0.0%	1	12.5%	1.000
MDMA	4	33.3%	0	0.0%	4	50.0%	0.208
コカイン	2	16.7%	0	0.0%	2	25.0%	0.515
ヘロイン	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	—
LSD	4	33.3%	0	0.0%	4	50.0%	0.208
処方薬乱用	6	50.0%	1	25.0%	5	62.5%	0.545
市販薬乱用	5	41.7%	0	0.0%	5	62.5%	0.087
その他	1	8.3%	0	0.0%	1	12.5%	1.000
DAST-20							
スコア平均値	6.8点		3.3点		8.6点		0.038
DAST陽性	8	66.8%	1	25.0%	7	87.5%	0.067
MINI							
薬物依存	6	50.0%	1	25.0%	5	62.5%	0.545
薬物乱用	10	83.3%	3	75.0%	7	87.5%	1.000

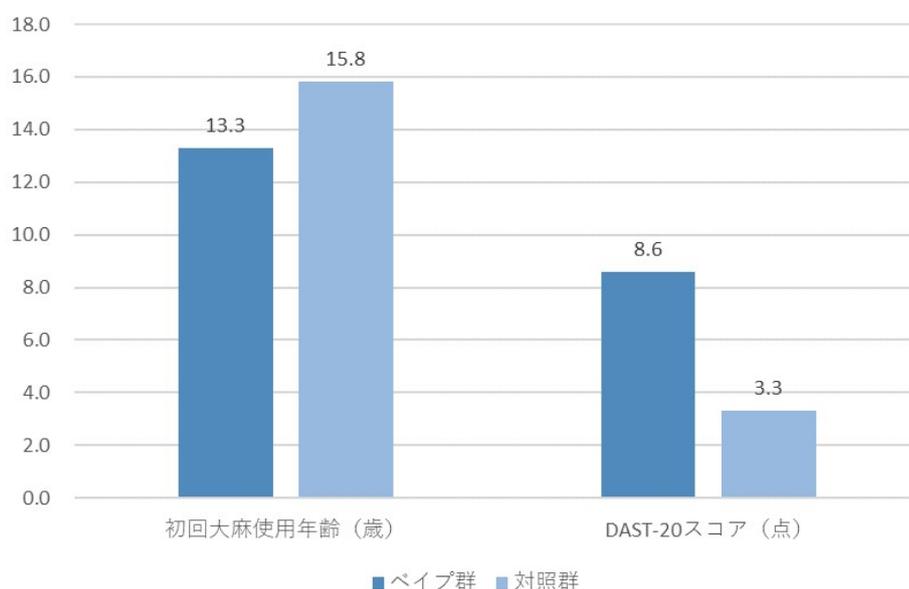


図1. 大麻パイプ使用群と対照群（非使用者）の大麻初回使用年齢およびDAST-20スコアの平均値
 パイプ群：過去1年以内に大麻パイプの使用が認められた大麻使用少年
 対照群：過去1年以内に大麻パイプの使用が認められなかった大麻使用少年